



写真-1 甲子園五番町交差点から北東方向の枝川跡を撮影（平成25年12月）

■ 武庫川改修の一環として枝川・申川を廃川に⇒『甲子園』の誕生

今から100年ほど前まで、甲子園筋（一般県道340号浜甲子園甲子園口停車場線）は武庫川から枝分かれた川でした。川の名は文字通り「枝川」。JR東海道線直下で枝分かれして南西方向に流れ、阪神電鉄枝川橋梁の下流でさらに申（さる）川を分岐していました。上の写真-1は現在の甲子園筋、右下の写真-2は、大正時代、枝川に架かる旧国道の橋・枝川橋を上流側から撮影したものです。2枚の写真は、撮影方向が違うものの、ほぼ同じ場所の今と昔です。

大正10（1921）年4月、兵庫県は“暴れ川”であった武庫川を改修するために、派川である枝川と申川を廃川にして払い下げることで資金を得ることを決定します。（詳しい経緯はNo.27「武庫川」参照）

大正12（1937）年3月、武庫川改修第1期工事が完成し、枝川樋門^{*1}（写真-3）および枝川締切堤防によって枝川が締め切られました。その結果生まれた廃川敷地は24万4596坪（≒80ha：甲子園球場21個分）で、内道路および水路敷地に2万596坪を充当、残る22万4千坪を420万円ですべて買い受けたのが阪神電鉄でした。

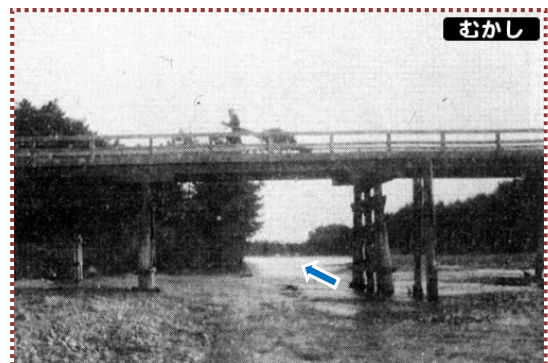


写真-2 枝川に架かる枝川橋（『鳴尾村誌』から引用）

阪神電鉄は、阪神電鉄以北を田園住宅街に、以南をスポーツ・レクリエーションゾーンとする構想の下、その一環として大正12年（1923）11月28日、枝川と申川の分岐点に「枝川運動場」の名称のもと野球場を建設することを決定し、翌大正13（1924）年から野球場建設をはじめとする廃川敷の整備がスタートします。

この年は、十干十二支（じっかんじゅうにし）の最初の組み合わせに当たる甲子年（きのえねのとし）という 60 年に一度の縁起の良い年であることから、同年 1 月 7 日の阪神電鉄重役会で、この地域を「甲子園」と命名することに。

今回は、この甲子園筋をウロウロしながら枝川および申川の生い立ちや廃川敷地の開発等について調べてみました。
※1 枝川樋門：武庫川からの取水用樋門で、現在は機能していない。

■ 枝川・申川の生い立ち

枝川・申川ともに、“暴れ川”であった武庫川の氾濫により誕生した川です。

枝川は、弘治 3（1557）年の氾濫により形成されたものです。また、万治 2（1659）年には『戸崎切れ』と呼ばれる大洪水が起きます。これは、武庫川と枝川の分岐点付近の堤防が約 500m にわたって決壊し、小曾根・小松・鳴尾村全てが流されたという大変な水害でした。鳴尾に流れ込んだ土砂の量は膨大で、かつては海か、せいぜい浅瀬に砂州がある程度場所（現在の旧国道以南）が陸地になったそうです。

一方、申川は元文 5（1740）年の枝川氾濫により誕生したといわれています。武庫川、枝川が決壊し、段上村から今津村まで相当な被害が出て、西宮神社の大練堀までが浸水し一部を倒壊させたとも言われています。なお、この派川名「申川」は、この年が十二支で申年だったことに由来しています。

■ 枝川の誕生が多くの犠牲者を出した水争いの遠因に

武庫川下流域右岸の鳴尾村周辺は、その地域の成因から見てもわかるように砂地であり農業用水が不足するため、上流の瓦林村から北郷（ほくごう）用水路で水を分けてもらい、その井水使用料として米 5 石を瓦林村に支払っていました。しかし、弘治 3（1557）年に出来たと言われる枝川により用水路が分断された後は特に水は不足しがちだったようです。

そのような中、大旱魃に襲われた天正 19（1591）年、鳴尾村と瓦林村との間で、北郷公園の石碑に刻まれている（写真-5 の碑文）ような水争いが起き多数の死傷者が出ました。この事件では、武器を使った争いごとに厳しい姿勢で臨んでいた豊臣秀吉の方針により、鳴尾村 25 人と瓦林村 26 人に、加勢した近隣の農民も合せ、何と 83 名もの農民が処刑されました。これが『天正北郷樋事件』です。



写真-4 北郷公園の義民碑

裁判の結果、鳴尾村民 25 人の命と引き換えに守られた鳴尾村の水利。その裁許状と、前田玄以（まえだけんい：豊臣政権における五奉行の一人）から鳴尾村の領主・佐々孫十郎に宛てた書状（今後争論が起きないように領民に言い渡すことという内容）は、村の水利権を保証する重要な書類として今も大切に保管されているそうです。

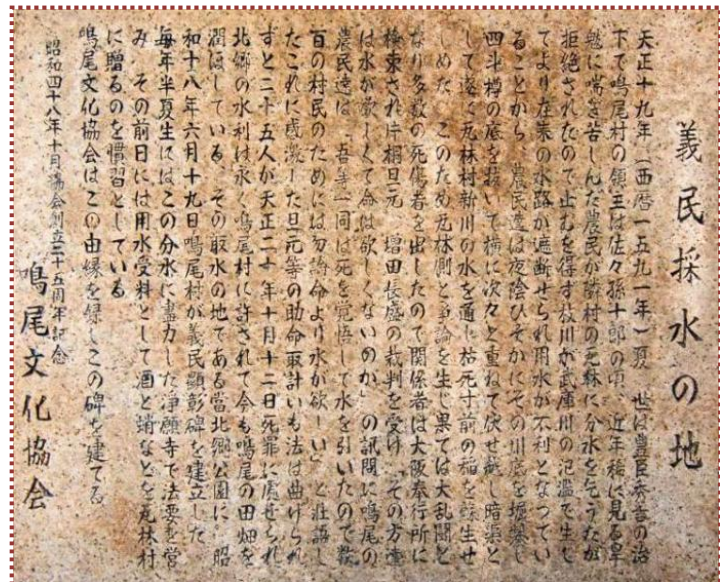


写真-5 「義民採水の地」碑文

写真-5 の碑文は、文字が小さいので読みづらいかも。碑文は以下のとおりです。

義民採水の地

天正十九年（西暦一五九一年）夏 世は豊臣秀吉の治下で鳴尾村の領主は佐々孫十郎の頃、近年稀に見る旱魃に喘ぎ苦しんだ農民が隣村の瓦林に分水を乞うたが拒絶されたので止むを得ず枝川が武庫川の氾濫で生じてより在来の水路が遮断せられ用水が不利となっていることから、農民たちは夜陰ひそかにその川底を掘鑿し四斗樽の底を抜いて横に次々と重ねて伏せ越し暗渠として遂に瓦林村新川の水を通じ枯死寸前の稲を蘇生せしめた このため瓦林側と争論

を生じ果ては大乱闘なり多数の死傷者を出したので関係者は大坂奉行所に検束され、片桐且元、増田長盛の裁判を受け「その方達は水が欲しくて命は欲しくないのか」の尋問に鳴尾の農民達は「吾等一同は死を覚悟して水を引いたので数百の農民のためには勿論命より水が欲しい」と壮語した これに感激した且元等の助命取計いも法は曲げられずと二十五人が天正二十年十月十二日死罪に處せられ北郷の水利は永く鳴尾村に許されて今も鳴尾の田畑を潤ほしている、その取水の地である当北郷公園に、昭和十八年六月十九日鳴尾村が義民顕彰碑を建立した
 毎年半夏生にはこの分水に尽力した浄願寺で法要を営み、その前日には用水受料として酒と蛸などを瓦林村に贈るのを慣習としている
 鳴尾文化協会はこの由縁を録しこの碑を建てる

昭和四十八年十月協会創立二十五周年記念
 鳴尾文化協会

さて、上記の碑文中「…その川底を掘削し四斗樽の底を抜いて横に次々と重ねて伏せ越し暗渠として…」とありますが、樽の底を抜いた状態では土圧に耐えるどころか、その前にバラバラになってしまいます。

大正末期の工事の際に長さ 1m ほどの箱型の楠材が出土し、これが暗渠に用いられた材料だったのでは、と言われていますが、残念ながら戦災で焼失し天正年間のものだったのかは不明です。



写真-6 新堀川沿いにある取水樋門



写真-7 北郷用水の取水樋門

甲子園筋の西を併行して流れる新堀川に、枝川を横断して伏せられていた北郷用水の取水樋門が残されていて、「鳴尾義民」によって守られた水利権の象徴として西宮市の文化財に指定されています。取水部は往時の姿そのままではなく、模式的に復元したものと思われる。

新堀川は寛永 13 (1636) 年につくられた用水路であることから、北郷用水は新堀川からの取水ではなく、新堀川を横断して下瓦林の用水から取っていたと考えられています。



写真-8 浄願寺「義民碑」



写真-9 ハツ松公園
 「義民顕彰碑」

なお、甲子園六番町にある浄願寺の境内にも西宮市の文化財に指定されている「義民碑」があり(写真-8)、寺の西にある「ハツ松公園」にも「義民顕彰碑」が建立されています(写真-9)。

鳴尾村周辺は、明治以降の開発、第二次世界大戦の空襲などで土地利用形態が大きく変貌し農地はほとんど宅地化されました。25 人の尊い命と引き換えに守られた水利権ですが、残念ながら現在は活用されていません。

■ 枝川・申川の廃川敷地開発

阪神電鉄が取得した廃川敷地の開発で、まず取り組んだのが甲子園球場の建設でした。『市外居住のすすめ』に謳われたような健康・健全な郊外生活を求める衛生思想を基軸として、「甲子園」の名を冠した一連の住宅地経営がこれに続きました。特に武庫大橋に近い上甲子園地域は、廃川沿いに松が残っており、建売をするよりは高級住宅地の建設を見込んだ大きな敷地で売る土地経営に適しているとされたため、健康・健全のイメージに沿って、緑豊かな庭を持つ閑静な住環境が形成されることとなりました。

また、阪神電鉄は甲子園住宅経営地に水を供給するため、昭和 7 (1932) 年 3 月 4 日に甲子園浄水場を開設しています。場所は、枝川樋門のすぐそばです(昭和 54 年 1 月 1 日に西宮市へ譲渡)。

なお、枝川はそもそも河床が背後地盤より高い天井川であったことから、廃川敷地はわざわざ埋め立てを行う必要がなく整地するだけで事足りたようです。確かに、甲子園筋の両側は離れるにしたがって地盤は低くなっていました。

■ 甲子園球場の建設

大正 4 (1915) 年に豊中球場で始まった全国中等学校優勝野球大会は、第 3 回大会から武庫郡鳴尾村 (1951 年に西宮市と合併) にある鳴尾球場で開催されていましたが、人気の高まりにつれ大勢の観客を収容しきれなくなっていました。

第 9 回大会準決勝の立命館中学 vs 甲陽中学では、超満員の観客がグラウンドになだれ込み試合が続行できなくなったことがあり、この事態を重く見た主催者の大阪朝日新聞社は本格的な球場建設を提案。また鳴尾球場の所有者である阪神電鉄も、廃川敷地開発の一環として新球場建設の計画を進めていたことから思惑が一致、阪神電鉄は新球場建設を決断します。

甲子園球場は、阪神電鉄の社員だった野田誠三^{※2} 技師の設計のもと、大林組が施工しています。起工式は大正 13 (1924) 年 3 月 11 日に行われ、第 10 回大会に間に合わせるため、わずか 5 ヶ月というきびしい工期設定でしたが、同年 8 月 11 日に竣工式が行われました。

当初、陸上競技場や球技場としても利用されることを念頭に設計されたため、現在の目から見ても過大といえるサイズとなっています。そういえばアメフトの「甲子園ボウル」の開催場所は甲子園球場でした。完成するまでは「枝川運動場」という名称でしたが、後に「甲子園大運動場」と命名されました。

球場完成後も周辺の開発が阪神電鉄によって進められ、遊園地・動物園・水族館・総合競技場・テニスコート・競技用プールなどが設けられ、既存の鳴尾競馬場とゴルフ場 (現在川西市にある鳴尾ゴルフ倶楽部の前身) を含め、一帯は『阪神間モダニズム』を代表する一大レジャーゾーンとなりました。総合競技場は、大運動場から陸上競技場や球技場としての機能を移転したもので、「甲子園大運動場」から「甲子園球場」に名称変更されたのはこの時期と思われる。



写真-10 甲子園球場

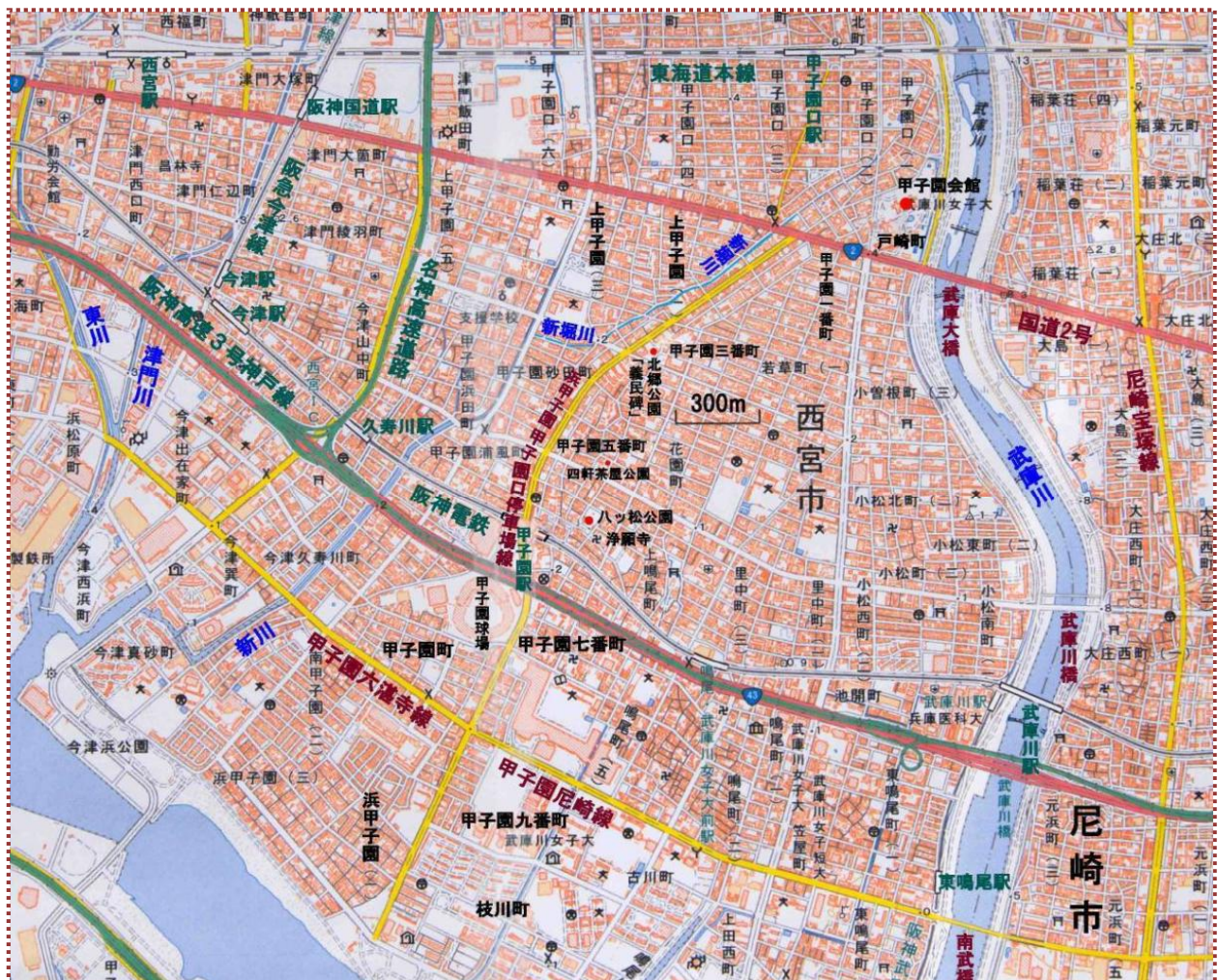


図-1 甲子園周辺の地図

また、昭和 10 (1935) 年には阪神電鉄によって甲子園球場を本拠地とする大阪野球倶楽部 (球団名大阪タイガース・現阪神タイガース) が設立されました。昨年 (2025 年) は、阪神タイガース創立 90 周年に当たる節目の年で、見事リーグ制覇することができました。

※2 野田誠三：加西市出身。京都帝国大学工学部卒業後、大正 11 (1922) 年に阪神電鉄へ入社。大正 13 (1924) 年から甲子園球場建設の設計主任として携わり、昭和 26 (1951) 年に社長に就任。昭和 42 (1967) 年から 5 年間、会長を務めた。戦争被害が大きかった阪神電鉄を見事に「阪神間の大動脈」としてよみがえらせた電鉄史に残る功労者である。また、阪神タイガースのオーナーを昭和 27 (1952) 年から 23 年間務め、昭和 49 (1974) 年には野球殿堂入りした。

■ 甲子園ホテルの建設

廃川敷地にはリゾートホテルとして「甲子園ホテル」も建設されました。帝国ホテル元支配人の林愛作を擁して、完成間もない武庫大橋西詰の松林辺りの廃川敷を選び、設計には遠藤新を起用しました。遠藤は、帝国ホテル新館を設計したフランク・ロイド・ライトの弟子で、洋式建築に『和』の要素を巧みに取り入れ、華麗でモダンな姿は「東の帝国ホテル、西の甲子園ホテル」と並び称されました。

建築工事は甲子園球場同様、大林組が行っています。

昭和 5 (1930) 年に開業した「甲子園ホテル」は、大阪の迎賓館として利用され、また阪神間に移住してきた中産階級の社交の場にもなっていました。太平洋戦争の激化によりホテルとして営業したのはわずか 14 年でした。

昭和 19 (1944) 年国に接収されて海軍病院に、戦後は進駐軍の将校宿舎として 10 年間使われ、その後は旧大蔵省が管理していました。昭和 40 (1965) 年、学校法人「武庫川学院」が国から譲り受け、武庫川女子大学の学舎「甲子園会館」として利用されています。

平成 19 (2007) 年に国の近代化産業遺産、平成 20 (2008) 年度には県の景観形成重要建造物に指定、さらに平成 21 (2009) 年には国の登録有形文化財に登録されています。



写真-11 旧甲子園ホテル



写真-12 武庫川右岸堤防上から旧甲子園ホテルを撮影

■ 甲子園筋には枝川の名残りが・・・

甲子園筋を歩いていると、所々に枝川の名残りを見ることができます。

(1) 土手跡

甲子園球場と甲子園駅の間や甲子園三番町の「北郷公園」に土手跡が残っています。(写真-13・14・15)



写真-13 東側土手跡



写真-14 西側土手跡



写真-15 北郷公園

(2) 橋の名残り

阪神電鉄は、都市間電気鉄道（インターアーバン）としては日本で最も古く、明治 38（1905）年に営業を開始しています。なので、枝川にも橋を架ける必要があったわけで、その橋の名が「枝川橋梁」として今も残っています。甲子園駅東側の橋梁の桁には、「枝川橋梁」の銘板が貼られています。

また、阪神電鉄から北へ約 300m の地点を東西に走る旧国道にはかつて「枝川橋」と言う名の木橋が架かっていました（写真-2）。この橋の親柱とおぼしき石柱が、甲子園 2 番町の歩道沿いに置かれています。本来あった位置から約 1km も移動して、うっかりしていると見落としそうです。



写真-16 枝川橋の親柱

(3) 渡しの名残り

江戸時代、中国街道が枝川を渡るところに「六石の渡し」がありました。中国街道は大阪と西国を結ぶ唯一の道で、西国諸大名や商人など多くの旅人が行き交っていましたが、枝川を渡る所に常設の橋はなく、水が少ないときは歩いて渡れましたが、水量がある時は人足を雇って担いで渡してもらい、さらに水かさが増すと渡し舟で渡し、更に増水すると川止め。そのような旅人のために川の両側に茶屋があり、食べ物なども提供してすいぶんと繁盛していたそうです。

川の東、鳴尾村側の茶屋のある辺りは四軒茶屋と呼ばれ、夏などは冷やした西瓜が名物だったとか。川の西側の茶屋は餅が名物で、一日に六石^{*3}も売れるというので「六石の餅」と言われていました。これに因んで、この辺りは「六石」と呼ばれ、渡しも「六石の渡し」と呼ばれていました。

明治になって鉄道が発達すると通行人は激減、すっかり寂れてしまいましたが、六石の名前は「甲子園六石町」として今に残り、四軒茶屋は甲子園五番町にある「四軒茶屋公園」にその名を留めています。



写真-17 四軒茶屋公園の標柱

※3「石(にく)」: 1石は10斗にあたり、同じく100升、1,000合に相当する。1食に米1合、1日3合がおおむね成人一人の消費量とされているので、1石は成人1人が1年間に消費する量にほぼ等しいと見なされ、示準として換算されてきた(1,000合/1日3合で333日分)。なお、面積を表す単位の「反」は、米1石の収穫が上げられる田の面積として定義されたものであった。

■ モノローグ

高校野球の聖地であり、阪神タイガースの本拠地でもある甲子園球場ですが、筆者が行くと負けるのでしばらく行ってません。そのタイガースが令和 5（2023）年に、岡田監督のもと昭和 60（1985）年以来となる日本一を達成し、令和 7（2025）年は藤川監督のもとリーグ制覇しています。

最下位が続いた暗黒時代を知っている筆者としては、今の時代が夢のようです。外国人の助っ人やFAに頼らず、自前で育てた選手がチームの中心となって活躍する姿は、10年前には想像もつきませんでした。

筆者はタイガースファン歴がすでに半世紀を超えていますが、今のチームが最強ではないでしょうか。



写真-18 勝利のジェット風船（甲子園球場にて）

【参考資料】

- 『阪神間モダンズム』 「阪神間モダンズム」展実行委員会編著 平成9年10月
- 『鳴尾村誌 1889-1951』 鳴尾村誌編纂委員会編纂 平成17年3月
- 『武庫郡誌』 武庫郡教育会編纂 大正10年11月
- 『甲子の歳』 舞坂悦治 昭和58年8月
- 『阪神甲子園球場、阪神電気鉄道、野田誠三、甲子園会館、石(にく)』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発刊：平成 26（2014）年 1 月 『ひょうご水百景』 No.32

改訂：令和 8（2026）年 4 月 『ひょうご水百景』 No.32